

プラトーン哲學資料論 (下)

三 井 浩

(八) 傳記資料論

茲に「傳記」といふのは外的傳記を指す。「傳記」を廣義に解すれば、哲學的業績そのものを含み、「プラトーンに於ける哲學的結神の發展」がその主要部分をなすことになる。併し今はかゝる意味に用ゐない。尤も廣・狹二義の境は不明である。のみならず外的傳記のみを分離して考へることは不可能である。併し一應區別してその資料的根據を吟味して見ることは可能でもあり、また便宜でもある。兩者の聯關は「本論」にゆづらなければならぬ。

プラトーンの傳記については既に西洋の學者が豊富な資料にもとづいて、綿密な研究を遂げてをり、今更我々が更めて考へて見る必要もなさうであるが、併し例へばヴィラモウイツとバーネット・テイラーとを比較して見てもわかる様に、未だ必ずしも定説があるわけではない。それは資料の價值判定が學者によつて異なるからである。のみならず、たとへばアカデーメイアに學園を建設したといふことも、何を典據としてゐるのか。バーネット・テイラーの如くプラトーンの著作・書簡を根本資料とし、デイオゲネース・ラエルティオス等の所傳を疑ふならば、確かな典據は見出されないのではないか。傳記の資料についても、先きに著作について述べたと同じことがすべて云ひ得らるゝのであるが、これ等の諸點は既に自明なこととしてすべて省略し、以下傳記の資料並ひにその資料的價值を考へて見

ることにする。さうして最後に上掲(十二月號五一頁)「プラトーン著作年表」中傳記に屬するものの典拠を掲げることにして度い。(典拠は「補遺」として次號に載せることにした。)

(1) 古代の所傳——D・Lを中心として——

プラトーン傳として最も詳細であり、また最も普通に使用されてゐるものはディオゲネース・ラエルティオスの第三卷であるが、そのD・Lにはスペウシッポスの「プラトーンの葬宴」(III 2)「プラトーン頌詞」(IV 5)等の書名が誌されまたヘルモドロスの言葉が典拠として用ゐられてゐる(III 6, II 10)。従つてプラトーンの直弟子にも既にプラトーン傳に類するものがあつたわけである。この外なほプラトーンの直弟子にしてプラトーン傳を著した者としてツエラーはシンプリキオスのアリストテレース自然學註釋、スイダスの辭典を典拠として、ピリッポス、クセノクラテースの二者を上げ、ユーベルヴェク・プレヒテルは之れにアリストテレース、エラストス、アスクレピアデースの三者を附け加へてゐる。併し此等は散佚して傳はらないとせらるゝ。またアリストテレースの直弟子のアリストクセノスの「プラトーン傳」^{ビテス}なる書物がD・Lに上げられてゐる。此れも散佚して傳はらない。にも拘らず茲に散佚書の著者を上ぐる煩を省かなかつたのは現存所傳の諸部分の資料的價值を考ふる際に必要であるがために外ならない。

* ツエラーがアリストテレースを上げてゐないのは、その典拠とせらるゝ斷片六五〇ローゼ(一八八六)が古いアリストテレース全集には見出されず、おそらくツエラー時代には未発見のものであつたがためであらう。ニラストス、アスクレピアデースはヘルモドロスと共にシンプリキオスの同處に上げられてゐるにも拘らず、ツエラーはヘルモドロスのみを上げてゐるのは何故か詳かでない。併しこの兩者は別に必要はない。

次に現存プラトーン所傳として上ぐべきものは、アラビア傳を除けば、次の六傳である。

- (一) ピロデーモス。(二) アピユレイウス。(三) デイゲネース・ラーエルテイオス。
 (四) ポルピユリオス。(五) オリユムピオドーロス。(六) スイダス。

然るにこの中、(一)ピロデーモスは前六〇年頃のエピク로스學徒の著作「哲學者の系統」（ユクレクテイクシス）中アカデーメイア學派を扱へるもの一部分にすぎない（U. Pr. S. 180: 41）。(二)ポルピユリオス（三世紀）は新プラトーン學派に屬するが、そのプラトーン傳は哲學史の一部であり、ピタゴラス傳以外は只斷片のみ傳はり、而かも傳記的ではない（同上書一一頁一八〇頁）。(六)スイダスの辭典ははるか後の十世紀に屬するが、その内容はヘスキオス（五九〇年頃）の論文をふくんでゐる。併しヘスキオスはD・Lに由つたか或ひは少くともそれと同じ著作から拔萃してゐる（Hicks, D. L. p. 25）。従つてD・Lに見出されないものはヘスキオス・スイダスには無いとせらるゝ（ヴァイラモウヰツ、プラトーンII一頁）。かくて、(二)のアピユレイウス（後三世紀）の「プラトーンとその教説（ドクテ）とについて」、(三)のD・L、(五)のオリユムピオドーロス（六世紀後半）の「プラトーン傳」及び「プラトーン哲學序説」とが残ることになる*。

* オリユムピオドーロスは新プラトーン主義のアレキサンドリア學派に屬し、プラトーンの著作「大アルキピアデース」「ゴルギアース」「ピレーボス」「パイドーン」（皆現存）に註釋を附けた。「プラトーン傳」と稱するのはその大アルキピアデース註釋の序説の一部分のことである。これは彼の著作ではなく、口述の筆録である（Cf. Zeller III, p. 597ff.）。然るに彼の「プラトーン哲學序説」については異論がある。ツェラー、スイエ（「プラトーン書簡集」八頁）、ロバン（「プラトーン」三〇頁）等はオリユムピオドーロス作としてゐるが、プレヒテルは之に相當すると考へらるゝヘルマン本六卷一九六頁以下をオリユムピオドーロスの所には上げず、「Anon.」Proleg.として引用してゐる（一八〇頁）。その始めの部分は古寫本W（十二月三二頁參照）に附いてゐたもの

としても、何故序説全體が無名氏のものであつてオリュムピオドロス作ではないのか、その理由は詳かでない。今は暫らく通説に従ふ。

さて、此の三者の内容は符合する(ヴァイラモヴィッツ同上箇所)。而してD・Lは詳しい典拠を掲げてゐる。従つてD・Lを中心にして古代のプラトーン所傳を考察することにする。^{*}

* ツェラーはD・L及びオリュムピオドロスを上げ(アピユレイウスをも採用してゐるが)、ヴァイラモヴィッツは三者を上げてD・Lを主とし、テイラーも三者を上げそのうち最も悪くないのはD・Lだと云つてゐる。

文書はその成立の時及び處、典拠または傳統、著者の方法(及び性格)等によつて、その資料的價値が定められる。然るに、「哲學者傳」(詳しくは「著名哲學者の生涯と思想十卷」寫本Pの表題は更に詳しいが省略する)の著者とさるゝダイゲネース・ラエルテイオスなる者が何時、何處で生れた如何なる人であつたかについては何處にも記されてゐない(Hicks: D. L. P. N.)。此の書物を始めて引用した者は東ローマ帝國のビュザンティンのステパノス(六世紀)であるが、引用(三度)の箇所及び寫本によつて著者名がD・LともL・Dともなつてゐる(書名はすべて「哲學史」となつてゐるが)。次にD・Lに言及してゐるものはポテイオス(九世紀後出)、エウスタティオス(一一七五頃)ツェツェス(十二世紀)である(ハスキュオス・スイダスについては既述した)。以上原文ヒツタス同上書序文四六頁以下)。以上は東ローマ帝國に於ける記録であるが、コンスタンティノーポリスの陥落(一四五三)と共に書物は西方世界に流れ去つた。併し西方世界に於ても英人ウオルター・ド・バーレ(一二七五—一三五七、ドゥンス・スコトウスの弟子)が已にD・Lを根本資料として「哲學者の生と死」を著してゐる。更に十五世紀に入つて古學が復興し印刷術が發明されるに至つて、アンブロシウ

スのラテン譯(初版缺年、一四三二年譯了)が現れ、竟に一五三三年ギリヤ語原典の全卷がバーゼルに於て印刷された。爾來D・Lは流行の寵兒となり、また古代哲學研究の權威として目せらるるに至つた。即ちモンテーニユの愛讀書となり、その第十卷(エピクテウスの部分)がガッサンディによつて註解(一六四九)された。「レ・ミゼラブル」の老貧植物學者マブーフ氏が最後に賣拂つた書物は實に此のD・Lであつた。近世最初の哲學史とせらるゝスタンレイの「哲學史」(一六五五)もブリュケルの「哲學の批判的歴史」(一七四二—四四)も大體に於てD・Lを權威としてゐる(Hoppe: *The Book of D. L. its spirits and its method.* 1930. p. 33; Hicks: *op. cit.* p. xi)。哲學史がD・Lの權威を脱して眞に批判的な學となり得たのはおそらく、カントの影響を受けたテンネマンの哲學史十一卷(一七九八—一八一九)以來のことであらう。ヘーゲルの哲學史講義もその脚註について見ればテンネマンに據つてゐる箇所が多し。

併しD・Lについて批判的研究が始まつたのは十九世紀の中頃からである。以下大體ホープ(同上書三七—五九頁)の研究にもとづいて大略を考へて見よう。マレス(一八五三)はフアヴォリス(希臘名パポリノス、後一世紀前半)に關する論文を書き、その百十一斷片を蒐めてフアヴォリスがD・Lの主要資料であるとした。ニイチエ(一八六九)はフアヴォリスからのノートを別にすれば、D・Lはディオクレス(後一世紀)からの拔萃にすぎないとし、後(一八七〇)にはヒツポボトスをも主要源泉と看做した。

併しデイールスはその割期的な著述「ドクソグラフィ・グライキ」(一八七九)に於て、D・Lは單に一二の著書からの拔萃ではなく、テオプラストスに由來する二種の資料を綴り合はせたものであるとして、この書の形態(始めに綱要

があり次に詳述がある)を説明した。ディールスの此の説はD・Lの基いてゐる傳承に研究を向はしめた點に功績があるが、併し彼の主張は主として自然學者の説に關はるものである。(ニイチエは主としてストア・エピクロスの系統に關はる)。従つてプラトーンの場合には當てはまらない。ヴィラモーヴィツ(一八八〇)はディオゲネース以前の蒐集とディオゲネース自身による附加とを區別すべしとし、翌年有名な研究「カリュストスのアンティゴノス」に於てプラトーンを敘述してゐる第三卷はトラスユルロスに加工したものであるとした(ホープ四四頁)。其後ウゼネルの「エピクレア」(一八八七)の如き著名な研究があるが、當面の我々にはあまり關係がない。重要なのはエジエ(一八八一)レオ(一九〇一)等によつてなされた資料に關する歴史的發展的考察であらう。他の學問の歴史と同じく哲學の歴史も亦アリストテレスによつて始めて組織的に着手され(その萌芽はプラトーンにあるが)、此處からさまざまの系統が流れ出た。自然學者に關するテオプラストスの業績は優れてゐるとされるが、今は關係がない。さまざまの系統のうち文學的傳記群の系統がある。その創成者はアリストテレスの直弟子アリストクセノスであつた。その興味は併し哲學者の本質に觸れる事項には向はず、瑣細な逸話風なものに向いてゐた。而してそれには嚴密な典據が缺けてゐるために、口碑をたよりとし、それを種々に作りかへ、而もその際哲學者の醜聞へ強い嗜好が働いてゐた。アリストクセノスは讀書界の獵奇的興味をも斟酌し、偉人の私生活について「巷談」に類する「實話」を捏造した。その際師弟間の稚兒的關係が特に類型化され、ソークラテースとプラトーンは就中かゝる惡意を以つて取扱はれた(ニーベルヴェク・プレヒテル一四頁、上述アリストクセノスに關する敘述は同書山本光惠氏譯を採借して簡略したもの。猶アリストクセノスのソークラテース及びプラトーンに對する惡意ある態度並びにその理由についてはバーネット「ギリシヤ哲學」一五三頁、「初期ギリシヤ

哲學」三版二七九頁參)。このアリストクセノスは上述(三一頁)の如く「プラトーン傳」の著者である。彼以後アンティゴノス(前二九〇——二三九頃)、アレキサンドリアのソテイオン(前二〇〇——一七〇)等を経てD・Lに至るが今は一々それについて考へない。只この系統または傳承がアレキサンドリアの文人を経てゐることを記憶に留めて、第三卷の研究に進み度いとおもふ。

併しその前に彼の時處を考へておかう。彼が東ローマ帝國の人であつたことは彼に言及してゐる古記録がすべて東ローマ帝國の人々であつたことから推測されうるが、それ以上のことは詳かでない。また彼の年代については今日なほ定説がない。一九〇八年以前の諸説についてはトレヴィツソイ(同上年)にもとづくホープ同上書(五・六頁)が詳しい。之によれば諸説は紀元後一世紀より三世紀までの間を動搖してゐる。トレヴィツソイ自身は三世紀初頭。ヒツクス(十二頁)も同様であり、ブレヒテル(一九頁)も三世紀、ドラト(一九二)は二二五—二五〇間と限定してゐる。然るにテイラーはパポリノスへの參照が所持者の欄外書入であるとして一世紀の終とし、でなくば二世紀の終と見る。ホープは四世紀または六世紀としてゐる(八頁)。併しやはり三世紀の初め頃の作と看做すのが穩當であらうとおもふ。其の理由は三つ上げることができる。(1)上述(三三頁)のポテイオス(コンスタンチノポリスの監督牧師)のD・Lへの言及の本文には、「ソピステース・ソーパーテルの十二卷本中にある種々の拔萃を〔私は〕讀んだ。……彼はその書物を……から、又ラーエルテイオス・デイオゲネースの『哲學者傳』^{ビカイ}第一・五・九・十から編纂した。」とある(原文ヒツクス四八頁)。然るに此のソーパーテルはヤンブリコスの弟子であり、コンスタンチヌス大帝時代(三〇六—三三七)に異教のために身を以つて宣傳した者であつた(ホープ九頁以下)。従つてD・Lは三世紀末少くとも四世紀初め以

前の書である。また(2)この書に於て語られてゐる哲學者の中最も年代の新しい者はセクストスの弟子サトルニローヌ(九卷一六)とせらるゝがセクストスは後二世紀の人故D・Lは三世紀初め少くとも二世紀の終り以前の書ではない。次に(3)もし三世紀末もしくは四世紀の書であるとすれば、プラトーン哲學の愛好者を讀者としてゐる(三卷四十七卷)此の書物に新プラトーン主義の興起への言及が見出されないのは不可思議と云はなければならぬ。従つて此の書物は少くとも二世紀末より三世紀中頃までの間、おそらく三世紀初め頃の書と考へられる。

D・L第三卷のプラトーン傳とアピレイウス及びオリュンピオドロスの間には符合が存することは既に述べた。従つて此等に共通な根幹がD・Lの根底にあると考へられる。而してプラトーンの直弟子たちにもプラトーン傳とも稱すべきものがあつたのであるから、この根幹は相當に尊重してもよいものと考へられる。但しアリストクセノスの流をひくアレキサンドリアの文人の虚傳中傷等も混入してゐると考へなければならぬ。紀元後三世紀頃までには多くの虚傳が混入した筈である。また根幹の原文にD・L自身が挿入したものを削除して本文の意味を通るやうに復正しなければならぬ。D・Lの方法は根幹の原文に種々の著書からの抜萃を混合挿入するといふ方法であつた。勿論挿入文と雖も典據の如何によつては貴重な資料となる。併しD・Lの文の脈絡では意味をなさない場合がある。

D・L十卷のうち一卷全部を占めてゐるものはプラトーンとエピクロス(第十)の二人であるが、第十はエピクロスの著書からの抜萃であり、傳記が特に詳しいといふわけではない。第三卷全章(一〇九章)は大體次の如く分つことができよう。

一 傳記(一——四七)

二 附録(1)著作について(四七——六六)。(2)學說について(六七——八〇)。(3)分割(八一——一〇九)。

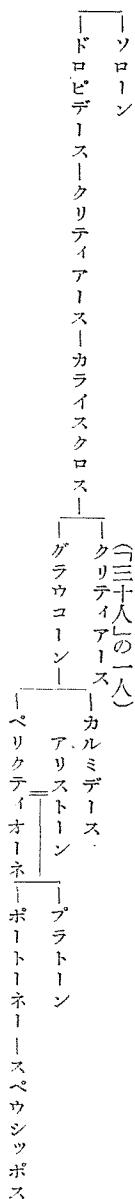
附録(1)は大體トラスユルロスによつたものであり、私は既にこれを利用した。(2)の學說は「テイマイオス」にもとづいたも

のであり、(3)の分別はアリストテレースの書物によると稱する、プラトーンの種々の事情についての分類であるが、アリストテレースの書物ではないとされてゐる。

従つて一―四七の傳記の部分のみを問題にすれば足りるのである。

以下アリストクセノス系の中傷虚傳を斥けて、大體に於て確實と考へらるゝ諸項目について順次に考へて見度い。アリストクセノス系でなくとも斥けなければならないものもある。例へばスペウシッポス其他にもとづくといふ、キリストの生誕に殆んど符合する物語である。アポロンがアリストーン(プラトーンの父)の夢に現はれプラトーンの母はアポロンによつて處女受胎をしたと傳へられてゐる。之を信ずるものは併し私の知る限りでは、一人も見當らない。D・Lも信じてゐるわけではない。彼は只報告してゐるのみである。スペウシッポス等も信じてゐたわけではない。アテーナイの巷談として語つてゐるにすぎない。哲學的牽強附會は必ずしも不可能ではなからうが、誰も試みてはゐないやうである。或ひは古代末期の新プラトーン主義者のなかにはゐるかも知れない。かゝる種類のものはすべて斥けることにする。逆にアリストクセノスが典據とされてゐる場合でも承認すべきものは採用しなければならぬ。

一、系圖。



此の系圖は次節プラトーンの著作によつて多少變更を要する。

二、年代。アポルロドーロスの「年代記」に據り第八十八ピリユムピア期(四二八—七—四二五、四)タルゲリオン月七日生、ヘルミツポスに據り第百〇八ピリユムピア期の第一年(三四八、七)に八十一歳を以つて没すとす。(ネアンテースは八十四歳とす)。

三、少年時代の學習と詩作。文字、體操を學びし後繪畫にいそしみ、詩作を試みた。先づディテュラムボスを、次に抒情詩と悲劇を。併しソークラテースの話の聽いて自作の詩を燒却した。

この點をバーネット・テイラー、ロバンは認めない。併し繪畫はとにかくとして彼が詩作したことは(詩の種類については諸傳間に異同があるにしても)オリユムピオドーロスの「プラトーン傳」(二節)「序說」(三節)アピユレイウス(一ノ一)等の誌すところであり、當時のアテーナイの文運、プラトーンの家柄、著作に見らるゝ藝術的天分等から見て、むしろ肯定すべきであらうと考へられる。ドイツの學者は大抵この點を承認してゐる。ツェラー(三九五頁以下)、ヴィラモーヴィッツ(I. S. 92: 123)、シュテンツェル(Pl. d. Erz. S. 82)、プレヒテル(一二八頁)、リツテル(Kants. S. 3)皆然り(燒却したことをも認む)。敘事詩の短かい断片のみ残存(十二月號三四頁參)。プラトーンの少年時代はその哲學的精神の誕生を考へるに際し極めて重要である。バーネット・テイラーの如く第七書簡にもとづいて政治的關心を中心として考へる態度は一面的たるを免れない。

* この點については猶五月號四七頁以下を參照され度し。

四、クラテュロス。D・Eは、ソークラテースの没後ヘーラクレイトス派のクラテュロスに附いたとする。然るに

アリストテレースの形而上學ではソークラテース説に接する前に「先づ」クラテュロス・ヘーラクレイトス説に親んだとあつた(五月號六一頁)。ロスはアリストテレースの方を正しいとし、D・Lは「クラテュロス」篇のなかでクラテュロスがソークラテースよりは可成若く取扱はれてゐる箇所(四二九d四四〇d)によつて惑はされたのであらうと推測し、而してD・Lによつてプラトーンがソークラテースの教を始めて聞いたのは二十歳であるとし(従つてこの點を否定するバーネット・テイラー説をD・Lに矛盾するとして斥ける。この點については次に述べる)さうすればソークラテースの教へを聞く前にクラテュロスに學ぶ年月は充分にあつた筈であると云つてゐる(ロス同所註)。この前後D・Lの原文の記述が前後矛盾し、ディオゲネース自身の手によつて挿入されたと考へらるゝ文章を削除して見なければならぬ。原文は「最初彼はアカデーメイアで、後コロノスの庭園で哲學してゐた、(アレクサンドロスの「ディオドロイ學統記」によれば)、ヘーラクレイトス〔説〕に従つて。其後悲劇で常に榮冠を争はうとした時ディオニュソス劇場の前でソークラテースの話を聞き、詩を燒却した。(次にある詩省略)。其時以來(滿二十歳と云はれてゐるが)ソークラテースの弟子となつた。ソークラテースの没後、彼はヘーラクレイトス派のクラテュロス及びパルメニデース説を哲學してゐたヘルモゲネースに附いた。」アカデーメイアで哲學したことが歸國後のことであることはD・Lの七・八節で明かである故に最初の文章は「最初彼はヘーラクレイトス〔説〕に従つて哲學してゐた」として他は挿入句として削除し、「ソークラテースの没後」は次のメガラ行にかゝるとし(彼はメガラ行を二十七歳の時としてゐる。さうすればソークラテースの没年または翌年となつて、クラテュロス及びヘルモゲネースには附いてゐる餘裕なく、又メガラ行の理由にも矛盾する)。「クラテュロスに附いた」ことは、「ヘーラクレイトス説に従つて」と同じ事をさしてゐると考へなけ

ればならない。D・Lは通俗本でありながら、讀むのに非常に疲れる。それは前後一貫してゐないからである。D・L研究は先づ「批判的出版」から着手されなければならぬと主張するゝわけである(Wilamowitz II S. 5: U.-Pr. S. 23.)。ヴィラモーヴィッツ(二卷二頁。ヒックス註も同機)は更に「其後悲劇で」以下詩までをも挿入句とし、最初の脈絡はヘーラクレイトス研究(クラテュロスのもとで)、次に四〇七—四〇〇年ソークラテースのもとに、次にメガラ行であつたとする確かに斯くすれば簡明である。併しヘーラクレイトス研究と詩作とは矛盾するであらうか。ヘーラクイトス研究とソークラテース親炙との間に詩の焼却があつても差支ない。否むしろあつた方がよいのではないか。併しこの點は資料論の範圍を脱する。今は詩の焼却の箇所は原文のまゝで差支へないと云ふに留める。

* アーベルトは「ヘーラクレイトスに従つて」の箇所を“wie Alexander in den Philosophenfolgen nach Herakleitos sagt”と譯す即ち「ヘーラクレイトス」をアレキサンドロスの典故となす。従つて彼はヘーラクレイトスは誰を指してゐるのかわからないと註してゐる。また詩の燒却の箇所の舊譯も原文の順序から云つて無理であるやうにおもへる。併しこの點は別に重大ではない。アーベルト譯は警戒する必要がある。

ロバンはこの點に關するアリストテレースの敘述を推論にもとづくものと考へて疑つてゐる(「プラトン」三頁)。併しアリストテレースの證言及びD・Lの脊後にある傳承を其處まで疑ふ必要があるだらうか。私はもし之が疑はしいならば、ロバンが事實と認めてゐる(七頁)プラトンのエジプト行キュレネ行は猶一層疑はしいとおもふ。後者をD・Lによつて認めながら前者を疑ふのは順位を誤るものではなからうか。

* バーネット(同上書二四二頁註)も多分「クラテュロス」「テアイテトス」からの推論であらうとするが、併し正しい雜論と看

做してゐる。

五、ソークラテース。ソークラテースとプラトーンとの關係はプラトーン傳のうち最も重大なものである。而もプラトーン傳のうち最も確實なものである。此點については後節プラトーンの著作考察の際(五一頁以下)にゆづり、今はD・Lを主として考へて見る。上述D・Lの二十歳説に對してはバーネット・テイラーの反對がある。彼等の考へによれば、カルミデースの甥なるプラトーンが二十歳までソークラテースに近かずにゐた筈はない。プラトーンは極めて若い時からソークラテースに接してゐたにちがひない、併しこの事から彼が弟子達の内輪の一人であつたことは歸結しない。むしろ彼を哲學に轉向せしめたものはソークラテースの死であつた様におもへる、といふのである(バーネット同上書二〇九頁)。ロスは上述の如く二十歳説を持し、バーネット説はD・Lに矛盾するとしてゐるが、併しプラトーンの著作を根據とするバーネット説はD・Lよりは強固であるとしなければならぬ。プラトーンは極めて若い時からソークラテースに接する機會があつたに相違ない。併し二十歳頃になつて彼はソークラテースに親炙し始め「辯明」以前の著作即ち「イオーン」「小ヒッピアース」を自己批判の書として書き、ソークラテースの死に逢つてその哲學的精神が確立したと見るべきではなからうか。バーネット等はソークラテース在世中にプラトーンが對話篇を書いたことを否定する。併しこの點については既に述べた(五月號四七頁以下)。バーネット説は首尾一貫し一點を破らうとすれば殆んどあらゆる點を破らなければならぬ程であるが、私は後に述べべき「辯明」の言葉によつてプラトーンがソークラテース没前に既に哲學に轉じてゐたことは疑を容れないと信する者である。のみならず「記憶の及ぶ限り幼い時より」ソークラテースに接してゐたプラトーンが二十七歳まで哲學に轉じなかつたとは到底考へられない。

従つて私はD・Lの二十歳説はプラトーンが詩作を断念し、ソークラテースに親炙し始めた年を指すものと考へる。

六、メガラ行。D・Lに曰く「ヘルモドロスの言によれば、プラトーンは二十八歳の時、他のソークラテイコイと一緒に、メガラのエウクレイデースの許に退いた」同書第二卷一〇六節は更に詳しい。曰く「ヘルモドロスの言によれば、プラトーン及び其他の哲學者たちはソークラテースの死後彼(エウクレイデース)のところに赴いた、僭主たちの殘虐を恐れて」。ヘルモドロスはプラトーンの直弟子であり、その著に「プラトーン傳」があつたことは上述した。従つて此の部分は「傳記」の資料的價值を疑ふバーネット・テイラーも特別扱ひにして無條件に肯定してゐる。

然るにルトスワフスキーは之を古典的時順觀の禍根と看做して否定した(十二月號四六頁)。彼は次の如く考へる。此のヘルモドロスがプラトーンの直弟子のヘルモドロスであるかどうか、たとひさうであると假定しても、此の證言は信じられない。何故ならプラトーンが恐れなければならなかつたものは「僭主たち」ではなくて三十人專制崩壊後復活した民主政治であつた筈であるから。この周知の史實を知らぬ者の證言は到底信することが出来ない。またキケロ(De rep. I. N. 16)は、プラトーンはソークラテースの死後先づエジプトに、後イタリアとシキリアに行つたと語つて、メガラ行には何等言及してゐない。彼はプラトーンの生活に興味を持ちアカデーミア學園を訪れたこともある程の人であるから、もしプラトーンのメガラ行が事實であつたとするならば、此の旅に言及しない筈はない、と考へなければならぬ(上掲書四三頁以下)。併し「僭主たち」といふ表現は必ずしも「三十人」を意味する必要はない。恐怖政治を行つた再興民主主義者たちを指してゐると考へることも可能である。たとへばクセノポーンはコリントスの民主政治執行者たちをその恐怖政治の故に「專制する人々」(τύραννοκρατορας)と呼んでゐる(ヘレニカ四卷四ノ六)。

また此のヘルモドロスがプラトーンの直弟子のヘルモドロスであることは、後者に「プラトーン傳」があつたことからして、容易に推定することができる（プラトーンの直弟子にヘルモドロスなる者があつたことの真據はツエラー同上書九八三頁註に詳かである）。キケロの證言は直弟子ヘルモドロスの證言を斥ける資格を有しない。もしキケロの證言を信すべきものとするならば、彼はおそらく海外への旅のみを問題としたのであらう。現代に於ては、私の記憶してゐる限りでは、プラトーンのメガラ行を否定もしくは黙殺してゐる學者はゐない。従つてルトスワフスキーの駁論を相手にする必要はなかつたわけであるが、併しこのメガラ行はソーケラテス没後プラトーンたちがその祖國に於て如何なる位置に立たねばならなかつたかを示すものとして、極めて重要である。もとより、此のメガラ行を根據とするテンネマン等の時順觀は否定されなければならない（十二月四五頁以下）。ルトスワフスキーの鏡双は力餘つて無辜のもので斬り拂つたのである。

七、海外への旅。D・L曰く「次に彼はキユレレーネーへ（數學者テオドロスの許へ）、其處からイタリヤへ（ピタゴラス學徒ピロラオス及びエウリュトスのところへ）旅した。さうして其處からアイギエプトスへ（神官プロベト神の代辯者カイ）を訪ねて行つた」（エジプト行の箇所には同伴者エウリピデーヌの事が記されてゐる）。然るに書簡第七（三二六らう）には「かういふ考へを持つて私はイタリヤとシケリアとに赴きました、それは初めて到着した時のことですが」とあり、また「私が初めてシラクサ（ギ晋スヌラーケーサイ）に到着しました時、四十歳近くのことでしたが、……」（三二四ら）とある。第七書簡は後に述べる如くプラトーンの眞翰と考ふべきものである。従つてD・Lイタリア行はシケリア行をふくんでゐるとするか、もしくは「及びシケリアに」でなければならぬ。D・Lはプラトーンの三回にわた

るシケリア行を後節(18)で一まとめにして述べ其處にディオーン及びディオエニシオス父子のことを語つてゐる。第一回シケリア行を知らないのではない。またディオーンの名は既に九節に見えてゐる。従つてD・Lの敘述は前後混雜し不明確の誇りは免れないが、第七書簡の語るところと必ずしも矛盾するものではない。

併し旅の範圍、順序に關しては異傳並びに異論がある。先づその範圍については、諸傳皆一致するとツェラーは考へてゐるが(同上、四〇四頁註)、プレヒテルはピロデーモス(前出)の異傳を上げてゐる。之によれば旅はイタリア、シケリアのみであるとする(U.-P. S. 183)。さうしてプレヒテルはD・L其他の諸傳に見出さるゝ旅にからむ空想、プラトーンの第七書簡の上述の箇所、ピロデーモスの外にオリヌムピオドロスに見らるゝ古傳の痕跡等を理由として、エジプト・キュレーネー行は正しき傳承に加へられた憶測にすぎぬと看做してゐる。バーネット(同上書二一頁)、テイラー(同上書四頁)もエジプト・キュレーネー行を疑ふ(テイラーの方がその程度高し)。併し諸傳は大體に於て一致してゐる。またエジプト行についてはキケロの上引の言葉もあり、前六〇頃のエピタロス學徒ピロデーモスを以つて、前一〇六一四三に生きプラトーンの生涯に興味を持ちアカデーメイア學園まで訪れたキケロを否定することは出来ない。D・Lの此の箇所にはエウリピデース(四〇六死)エジプト行同伴の如き虚構も見出されるが、併しかゝる虚傳は諸傳の根底にあると考へらるゝ正しい傳承を否定する根據にはならない。また第七書簡にエジプト・キュレーネー行が見出されないのはシラクサの政治的事件に關係がないから語られなかつたすぎないと考ふべきである。バーネット・テイラーは書翰を絶對的に信頼し、之を中心にして「諸傳」を斥けるが、かくてはプラトーン傳は全く政治家の傳記となり了る危険がある。猶D・Lにはエジプト行の次に「マゴス人(ペルシヤ人と考へてよい)とも交はらうとしたが、ア

シアに於ける戦争によつて阻まれた」とある。このことは通説に従つて削除したが、必ずしも考へられぬことではない。次に旅の順序については、D・Lはキュレーネー——イタリア——エジプトとし、キケロ（上掲所）等はエジプト——イタリア——シケリアとし、アピュレイウス（上掲書一ノ三）等はイタリア・シケリア——キュレーネー・エジプト——イタリア・シケリアとしてゐる。アピュレイウスは第七書簡に矛盾し、D・Lの傳承はその航路が交叉する。従つてキケロの順序が最も本當らしいと考へらるゝ。故に、キュレーネーよりはエジプトの方が表玄關であるとして、エジプト——キュレーネー——イタリア——シケリアといふ順序が最も自然である。ヴィラモーヴィッツも此の順序で述べてゐる（一巻二四二頁以下）。

なほ旅の目的に關しても異傳・異説がある。併し目的が何であつたかといふことは他の資料にもとづいて否定されない限り、緒極推測にもとづくことになる。テオドロス及びピロラオス訪問は、その生年が如何に定められるかによつて、或ひは否定されなければならぬかも知れない。然るにテオドロスはどの資料に基いて見てもソークラテースよりは年長であり（田中美智太郎譯「テアイチトス」三二五頁以下参照）ピロラオスはソークラテースの同時代者（Burnet: E. G. Ph. p. 276）とされるゝにも拘らず、テオドロスの場合は肯定（たとへば *wilamowitz: I. S. 245; Robin: op. cit. p. 7.*）さうくは可能視（Burnet: G. Ph. p. 211）され、ピロラオスの場合は或ひは生存を疑はれ（ツェラー同上書一〇頁註）或ひは歿殺されてゐる。これはD・L以外の諸傳がピロラオスを上げず、アルキュタスを共通して上げてゐる（ツェラー同所）ことに基くのであらう。ピロラオスに代ふるにアルキュタスを以つてするは諸家の通説であるが、只ホフマンはプラトーンとアルキュタスとの相識を多分第二回シケリア行の時と看做してゐる。ホフマンの所説はおそらく第七書簡三三六c7にもとづくものであらうか。

八、アカデーメイアに學園建設。D・L曰く「それからアテーナイへ歸つて、アカデーメイアに住んでゐた」これ

だけでは學園を建てた證據にはならない。

尤も、「住んでゐた」の原語ディエトリベンをアーベルトの様に「居所及び教場(Wohn- und Lehrsitze)として擡んだ」とすれば相當近くなるが、ディアトリベイン一字ではさうは譯せない。ヒツクスは、*Heim*、としてゐる。かういふコンキストの場合は「居留、滞在」が本義であらう。従つてアーベルトも下引ボレモーンの場合には「ディアトリポーン」を“*hieft sich dauernd auf*”としてゐる。

併し「傳」の終り近く(四一節)に「彼はアカデーメイアに葬られた。其處は彼が哲學しつゝ生涯の大半を送つた所である」とあり、また四卷一章のスペウシッポスの所に「プラトーンによつてアカデーメイアに建てられたムーセイオン」とあり、またプラトーンの直弟子で三代目の學頭とさるゝクセノクラテースについて「大抵アカデーメイアで暮してゐた」(四ノ六)とあり、四代目のボレモーンは「園に留つて世間から穩遁してゐた。それで弟子たちはムーセイオンや會堂(エックセドラ)の近くに小屋を作つて住んでゐた」(四ノ一九)と記されてゐる。

ムーセイオン及びエックセドラは何と譯すべきか。ムーセイオンはヒツクスによつて二箇所とも“*The Shrine of the Muses*”とされ、アーベルトによつて前の箇所は“*Lehrsaal*”、後は“*Museum*”と譯されてゐる。後の箇所をも“*Heiliger Saal*”と譯せば「エックセドラ」と重複するからであらう。エックセドラはヒツクス講堂(レクチャーホール)、アーベルト會堂(*Versammlungssaal*)である。ムーセイオンには「學校」の意味もあるが、ヒツクス譯を良しとし、エックセドラはアーベルト譯を取るべきではなからうか。エックセドラを講堂とするは譯しすぎとし、むしろ共同研究に集會する場所の意に解すべきであらう。

ボレモーン傳の「園」は勿論「アカデーメイアの園」を意味する。この箇所はその少しく前(一七節)に見えてゐるアンティゴノスの「列傳」(レキオ)に據つたものと考へらるゝ。然るにアンティゴノス(前二九〇——二三九頃)とボレモーン(三

七六頃死)とは時代が交叉してゐる。従つて見證とまでは云へぬにしても、相當に信用してよいと考へられる。

以上D・Lの諸所を綜合して見れば、アカデーメシアにプラトーンが學園(ムーサイの神殿と會堂とより成る)を建てたといふことは先づ事實と考へなければならぬ。さうしてその時期も、歸國後程なき頃と讀まれるD・Lの所傳が大體に於て事實に近いものであらうと考へられる。人々にとつては「歸國後アカデミー建設」といふことは自明の事實かも知れないが、プラトーン傳に於けるこの重要事件は、もしもテイラーたちの如く「傳」を疑ふならば、その典據は薄弱といはなければならぬものである。プラトーンの著作にも書簡にもアリストテレスの索引にも見出されない。キケロのアカデーメシア訪問(前七九一八)の時には既にスルラのアテーナイ攻撃(前八〇)によつてアカデーメシアは廢虚と化しその學園はアテーナイのプトレマイオス體育所内に移されてゐた。一九三〇年アリストプロンによつて發掘が企てられたといふが(ロバン同上書二二頁)其の後の消息を聞かない。

九、出征。D・L曰く「アリストクセノスによれば、プラトーンは三度出征した。一度はターナグラへ、二度目はコリントスへ、三度目はデーリオオンへ、此處でも彼は勇收賞を克ち得た。」併しデーリオオンの戦は四二四年であり(Thouk. IV 76 ff.; Bury: History of Greece, p. 472.)、四二八、七年生れのプラトーンが出征する筈はない。この戦にはソークラテースが出陣した(辯明二八〇、「饗宴」二二一a、「ラケース」初也)。而かもソークラテースは「辯明」によれば三度出征した(デーリオオン以外には、ポテイダイアとアムピポリスとへ)。従つて此のD・Lの報告はソークラテースの出征とプラトーンのそれとを混同してゐると考へなければならぬ。また、ヴェイラモーヴィッツ引用のアイリアノス(五ノ一六、七ノ一四)には「ソークラテースは三度出征したが、プラトーン自身も亦ターナグラとコリントスに

〔出征した〕とある(ヴィラモヴィッツ二卷四頁)。故にアリストクセノスの報告はアイリアノス所傳の如きものであり、L・Dはこの報告にプラトーンの著書にもとづくソクラテース出征を混入したと考へらるゝ。併しプラトーンが「勇敢賞を克ち得た」であらうことは、もしそれがアリストクセノスにもとづくものであるならば、事實でなければならぬ。(彼は事實を捏造してまでプラトーンを賞める筈はない)。またアリストクセノスにもとづくものではないにしても、充分首肯されうることである。

併しプラトーンの出征については、之を黙殺して語らぬ學者もある。即ちバーネット・テイラー、ユーベルヴェク・プレヒテル、ロバン等である。グロートがプラトーン出征を認めてゐるのは(上掲書第一卷一一六頁以下)、彼の歴史的感覚にもとづくものであらう。實際當時のアテーナイの軍事的状態から考へて見て、プラトーンが出征しなかつたといふことは、到底考へられないことである。またアリストクセノスは他の點に關しては信用できないにしても、かゝる點に關してまで虚言を吐くとは考へられない。但しプラトーンの出征を認める學者間にも何時如何なる戦に出陣したかについては、猶異説がある。ツェラーは四〇九年のメガラの戦とし(三九五頁註)、ヴィラモヴィッツは三九五及び三九四年のコリント戦役とし(二卷一八一頁)、リッテルは同上コリント戦役のほかに、プラトーンの兩兄が出陣した(『國家』三六八頁)四〇九及び七の戦(メガラ)、及び四〇六年のアルギヌーサイの戦にも出陣したにちがひないとしてゐる(Kerns, S. 2f.)。シテレンツェルは只ソクラテース没後としてゐる(Pl. d. Erz. S. 91)。ともかく三九五年頃コリント戦役に出陣し勇敢賞を克ち得たことは事實と看做すべきであらう。

* プラトーンの兩兄が出陣したメガラの戦は、テイラーによれば、四二四年の戦(Thouk. IV. 72)以外のものではあり得ないと

いふ(同上書四六三頁)。

十、シケリア行三度。上述の出陣についてD・Lはプラトーン哲學の要素(アリストテレースの燒直しと考へらるる)、其他虚傳と看做すべき事を語つた後、「プラトーンは三度シケリアに航した。」としてこれについて相當詳しく述べてゐるが、併しこの點に關しては、プラトーンの第七書簡が眞作とされなければならぬ以上、資料的寄與として認めらるべきものは存しない。

シケリア行を語り終つた後、D・Lはなほプラトーンが始めて導入した學問上の業績、喜劇詩人の詩、著作に關すること、逸話、死、遺言、墓碑銘、學徒等について述べてゐる。此等の報告のうち、用ふべきものは我々によつて既に用ゐられた。殘餘のものは虚傳と看做さるべきものである。但し學徒表は別である。學徒表に上述の附録がつづく。

以上を以つてD・Lを中心とする「プラトーン傳」考究を終ることにする。然るにプラトーン傳の資料としては上來度々關説した如く、プラトーン自身の著作並びに書簡がある。我々は次に此の兩者を考へて見なければならぬ。

(2) 著作

プラトーンは自己の思想を篇中の人物に語らせてゐるのみならず、自己自身のことには僅かに三度言及させてゐるにすぎない。併し登場人物中には親類の者もをり(たとへばカルミデース)、一家の人物については相當の智識を得ることが出来る。のみならず僅か三度にすぎぬ自己自身への言及も、一見取るに足らぬことのごとく見えながら、極めて重大な意味を含蓄してゐる。私は既に著作の眞偽を定め終へた。以下、眞作中プラトーン傳に資するところ有るものを拾集し、上述の「所傳」考究の缺を補つておき度いとおもふ。

一、家系圖。之はアテーナイに於けるプラトーンの政治的・社會的・文壇的位置を考へるに必要であり、また之によつて所傳の系圖も訂正さるべきであるが、省略することにした。

二、自己。プラトーンがその著作に於て「書簡」を除く、自己自身に言及してゐる箇所は僅かに三箇所である。

テイラーが二度として「辯明」三四a一を上げてゐないのは、グロート(第一卷二〇五頁)を翻製したためであらう。

ソークラテースは「辯明」に於て、自分が本當に青年達を墮落せしめた者であるならば、彼等の中既に壯年に達して、その若年時代に私から悪い助言を受けたと知つた者は、今こそ彼等自ら登段して私を告發し私に復讐すべきであらう。また若し彼等自らこれをなすことを欲しないとすれば、その父なり兄なり他の親戚の者なりが、苟も私によつてその一族の者が禍ひを蒙つてゐるとするならば、今こそそれを想ひ起して復讐すべきであらう。と言ひ、それ等の人々が多數法廷にゐるとしてその名を擧げてゐるが、その中に「其處にゐるアデイマンテス此のプラトーンの兄に當る」(三四a一)とある。この箇所はグロート・テイラーによつてあげられてゐないが、三箇所のうち最も大切である。何故ならば之によつて、プラトーン自らソークラテースの助言を受けた者なることを承認し、しかもこの事をソークラテースをして語らしめてゐるといふことがわかるからである。即ちもしもソークラテースの「弟子」といふ言葉を用ゐてもよいとするならば、プラトーンはソークラテースの自他ともに許す弟子であつたのである。

次に同じく「辯明」三八b6によれば、プラトーンはクリトレン、クリトブローロス、アポロドーロスと共にソークラテースに罰金三ツムナの刑を提議するやうに勧め、その保證人に立たうと申出た、そこでソークラテースはそれだけの金額を提議し、「諸君にとつて彼等はこれだけの金の信用できる保證人であるだらう」と語つてゐる。クリト

ンは同名の對話篇、「パイドーン」巻末によつて知らるゝ如くソークラテースの親友でありクリトブローロスはこのクリトーンの息子である。アポロドロスは「鑿安」(一七三d)等によつて知らるゝ如き熱狂的ソークラテース崇拜者である。プラトーンの名がソークラテースによつて第一に上げられてゐるのは、おそらく家柄からいつて裁判官たちに保證人として最も信用さるべき人物と考へられたからであらうが、とにかくクリトーン、アポロドロスの如き人物に先んじて擧名されてゐることはプラトーンがソークラテースの「内輪」の一人であつたことを確認せしめるに充分である。この點を認めぬ上述のバーネット説は首肯され得ない。

次に、「パイドーン」五九b一〇に「プラトーンは病氣だつたと想ひます。」とある。プラトーンは病氣のために、ソークラテースの死に居合はさなかつたと、パイドーンをして報せしめてゐるのである。これはバーネット註の如く「單純」なことであらうか。「辯明」に於てはプラトーン自身ソークラテースの言葉を親しく聞いたものとして、讀者に對してその内容上の責任を負ふてゐるに對し、「パイドーン」に於ては其場に居合はさなかつた者として、その内容が果してソークラテース自身の語つた言葉であるか否かに關しては必ずしも責任を負うてゐない。「辯明」はプラトーンの全著作中プラトーンが責任を以つてソークラテースの言葉を傳へた唯一の文書である。ソークラテース研究の基本書である。對話篇に於てはプラトーン自身は絶対に顔を見せない。「パイドーン」は然るにソークラテースの死を描くものである。「内輪の一人」なるプラトーンはその顔を見せなければならぬ。見せなければその理由を語らせなければならぬ。「プラトーンは病氣であつたと想ひます」の一句はプラトーンがソークラテースの「内輪」の一人であつたことを再び證明すると同時に、その内容は必ずしもソークラテース自身の言葉を語るものではないことを警告

する。此の點に於てもバーネット・テイラー説（「バイドーン」全卷のソークラテースを史的ソークラテースと看做す）は肯定され得ない。事實プラトーン自身病氣のために居合はさなかつたかどうかは推測の限りではない。

以上「辯明」「バイドーン」に於けるプラトーンの自己自身への言及はすべてソークラテースに關係する場合にのみ限られてゐる。これも重要な事實である。

(3) 書翰集

プラトーンの「書翰」は我々のテキストには十三通ある。ヘルマン本の第十四—十八は他所より附加せられたものであつて、プラトーンの寫本中にはないとされてゐる（バーネット本「書翰集」の末註、ビュデ版スイエ對譯本の總註五頁等による）。この五通は論外において差支へない。巴に紀元前後頃のトラスユルロス（第一節參）の四部集典に「書翰十三通、倫理的」として編せられ、その宛名も我々のテキストにあるものと一致する（D・L三ノ六一）。

* 只、我々のテキストにある「アリストドロロス宛」が「アリストデーモス宛」となつてゐる。

さて此等十三通の書翰は大體次の如く分類することができる。

* (一) 中の數字はバーネット本による頁數を示す。私は第一冊の「ラプトーン著作目録」では「枚數」を添へたが、書翰は短かすぎて枚數の表示は却つて煩雜である。

(一) デイオーンまたは其友宛

1 デイオーン宛 第四(二)

2 デイオーンの親戚及び友人宛 第七(三四)、第八(七)

プラトーン哲學資料論(下)

(一) デイオニュシオス宛

3 第一(一・五)、第二(六)、第三(六)、第十三(五)

(三) 國家の首長宛(デイオニュソス以外)

4 ペルデイツカス宛 第五(一)

5 ヘルミアス、エラストス、コリントス連名宛 第六(二)

6 アルキユタス宛 第九(一)、第十二(〇・五)

7 アリストドロロス宛 第十(〇・五)

8 ラオダマス宛 第十一(一)

(一)及び(二)はシラクサ事件に關するものである。(三)はプラトーンの哲人王の理論と實踐とを展開してゐる。

第七書翰は全書翰(三三・五枚)の半分を占むるのみならず、プラトーンの自傳とも稱すべきもの及び哲學的挿論をふくみ、最重要なものである。他は概ね短簡にすぎないが、もし眞作であることが證明されるならばプラトーン傳の一重要資料たるを失はなす。

* H・ユムベルツの *Platons Selbstbiographie*. (1928) は此の書簡に據るものである。

然らば此等の書簡は眞作であらうか。或ひは全部、或ひは大部分、或ひは一部分、或ひは一通、或ひは容通を眞作として今世紀に入つても未だ學者間に通説がない。

古代に於ては第十二(寫本に「プラトーン」のでなしとの異論ありといふ言葉が見えてゐる)を除けば疑惑を呼び起

してゐた。

キケロ(前一〇六—四三)は抄譯敷衍を試み、これをプラトーンに當てゝゐる。のみならず第七(Tusc. V 35; 100)及び第九(Offic. I 133)を明かにその署名者(プラトーン)のものとして看做してゐる。キケロと同時代のネーポスもブルータルコス(後五〇—二〇頃)も「ディオーン傳」を書くときには此等の書翰を、少くとも第七を用ゐてゐる筈である。その後も傳承は何の疑ひも無く受け繼がれた。プロテティノス(三〇三—二六九)も此等の書翰をプラトーンの眞翰と看做し、書翰第二の不明瞭な文章を幾度も繰りかへして註解してゐる(Ennerd. I. s. 2; V, 1-8)。プロク羅斯(四一〇—四八五)が始めて疑つたといふべきであらうか(十二月號二二頁註)。上述オリュムピオドロスの「プラトーン哲學序説」(二六節)に、プラトーン著作は三十六篇あるが、そのうち神的プロク羅斯は「エピノミス」及び「國家」と「法律」とを斥け(理由を略す、私)また「書翰」を文體が單調すぎるといふ理由で斥け、三十二對話篇を残した、と云つてゐるが、併しプロク羅斯の「國家」「法律」「書翰」偽作視といふことは、同書の他の箇所とも矛盾するのみならず、プロク羅斯自身^著自著に於いては書翰をプラトーンに歸してゐる。オリュムピオドロスはプロク羅斯を誤解してゐるのである。此れは同上註の如くツェラー以來通説となつた。

* スイェ「プラトーン書翰集」總註八頁に詳かである。書翰のカールステンに至るまでの「運命史」についてはスイェの同書に負ふところ甚大である。

かくの如く傳承されたことはプラトーンの著作一般の場合と同様である。中世は批判的精神を缺如せるのみではなく、他のギリシヤ古典と等しくプラトーンの書翰も亦無視されてゐた。ルネッサンスに到つてギリシヤ文化の復興と

ともに批判的精神も目ざめた。さうしてフィチノ(一四三三—九九)は第十三を疑ひ、その翻譯を欲しなかつた。然し他の書翰については疑念をさしはさまなかつた。カッドウオース(一六七八)は此の第十三書翰をキリスト者による僞書とした。然し古代書翰の學的研究はベントレイ一六九七によつて始めて着手された、彼は古代書翰の殆んど全部を僞書として斥けたが、プラトーンの書翰はそれ等のものとは異るとして眞書とした。

プラトーンの「書翰」に於ても「僞作」の聲が明瞭に響き初めたのは十八世紀末より十九世紀にかけてのドイツに於てであつた。就中プラトーンの「書翰」研究に専念したのはカールステン(一八五四)であり、彼は全書簡を僞書とした。かゝる傾向に對して傳承主義を唱へたのは前述の如くグロートであつた。

併しながらドイツに於ても今世紀に入るや、エドワード・マイヤー(*Geschichte des Altertums*. V. 1902. S. 502)は全書翰を眞書と認め、就中第十三、二、三、七、八を根本資本として、シラクサ改革の企圖を敘述した(*op. cit.* S. S. 502ff.)。

* Bury は當事件の源資料として *Platonic and Pseudo-Platonic Epistles* をあげて *History of Greece*. [1900] 2. ed. (1913, p. 879)。

猶マイヤー以前にも眞作性を主張したドイツの學者があつたのではない。即ちH・ラインホルト(一八八六)、フラス(一八九九)がある(ツェラー、プレヒテル、スイエ等による)。

更にC・リッテル(*Neue Untersuchung über Platon*, 1910. S. S. 327-124)は精密な文體研究並びに思想内容の吟味によつて、第三、七、八の三通を眞とした。但し第七書簡の「哲學的插論」(三四一b—三四五c)は文體も「エピノミス」(氏は之を僞作とする)に近く。プラトーンの單に存るものではありえなうとした(Kernig, 1931. S. 5 Anm.; S. 7

も同様)。

而してヴィラモーヴィッツが(一九一八)第六、七、八(十二月號二四頁に七、八、九とあるは誤り)の眞作性を認めるに至るや、十九世紀時代とは逆の方面をとり始め、「書簡集」の翻譯者アーベルトは第十二は僞書、第一は疑書ならんも、他は全部眞書なりとした(Platons Briefe, 1921)。而して書簡に於て後期對話篇の文體の主要特徴たるヒアートウス回避が見出されぬといふ反論に對しては、此等の書翰の如き純粹な「私講義」^{Privatvorlesungen}と公表を旨指してゐる藝術品とを同じに見てはならぬと答へてゐる(op. cit. S. 16)。其後ホフマンは第七を眞作、第六、八は疑作、他は全部僞作とし、ホルト(Die Briefe Platons, 1923)は全然ヴィラモトヴィッツに従ひ(スイエ五十四頁による)、プレヒテルは第三、六、七、八は眞、第一は僞、他は疑作とする(古代哲學史一七九、一九九頁)。プレヒテルはリツテルとヴィラモーヴィッツとの双方の研究を承認しようとするのであらう。

然るに英國に於ては一時却つてカールステンの研究に従つて全部を僞書とした、即ちジョーウエットは(Preface to the second and third Editions 1875/91)カールステンにもとづいてグロートを反駁した。(ジョーエットはその教養から見てむしろドイツ的といふべきであらう。)併しバーネット・テイラーに至つて傳承主義にかへつた(批判をへて變貌してゐるが)。テイラーの考へはバーネット(ギリシヤ哲學二〇五頁以下)の述べてゐることに實質的には異らない。次の如く考へる。一方の代表意見として抄出は稍、長きにわたるであらう。

ヴィラモーヴィッツが最も重要な第六、七、八を眞書と認めて以來「權威」に頼る人々はいそいで、少くともこの三通は認められねばならぬとした。併しこの三通を承認するなら當然、デオニュシオス宛の第二、三、十三及びディオーン宛の第四は認めねば

ならぬ。而して此等が眞書と認めらるゝならば、我々の寫本中のプラトーン書翰十三通を拒否すべき理由は殘らない。但し第一のみは文體上全く他のものと異なる。おそらく誤つて集中に取り入れられた誤認作であらう。また第十二は古代に於て寫本に偽書の疑ひが記されてゐる。其他の書翰が疑はるべき理由は存しない。第二、三に對する疑ひは誤解にもとづいてゐる。第六、七、八のみを認める傾向は單にヴィラモーヴィツツの名に對する奴隸的服従にすぎない。テイラーはかくして第一を例外とし(第二も或ひは偽作かも知れぬ)他を全部眞書とした。彼が外的證據として上ぐるものは(1)ビユーザンテインのアリストパネース(前出)がその三部叢典中に「書翰」を入れてゐること。而も其際その「書翰」は我々の有する十三通であることは明かである。さもなければその事について何等かの報告がある筈であるから。(2)またキケロは第四、九を引用し、特に第七を「かの最も高貴なる書翰」と呼んで常にプラトーン敘述の資料として用ゐることの二點である。內的證據としては文體が全くプラトーン的であり、かゝる文體を書きうる技術はプラトーンの死後一世紀には既に死滅し「アツテイシズム」の復興はキケロ後數代の時代に屬する。もしまた眞作に對する權威が欲しいなら、ベントレイ、コベット、グロート、プラス、マイヤーがあるとしてゐる(「プレイトー」一五頁以下)。

フランスでは書翰が特に問題にされたことはないが、ドイツの流れを汲むクーザン以來大體に於て偽書と看做してゐたが、二十世紀に入るやワデントンがグロートに倣つて全認した(スイエによる)。然るに一九二六年スイエが現れ、テキストの校訂、翻譯を試むるとともに、精緻な研究を序説として附け加へた。彼曰く、

第七、八は、プラトーン自身を著者とする方が單純であり、自然でもある(六十二頁)。第二と三とが文體上近いことは既にリッテルが證明した。此等にはピタゴラス主義が見られる(八一頁)。第三には「ヘレニスム」が見出される。修辭家の手に成るものであらう(八五頁以下)。第一は第三を豫想して、殆んど議論の餘地なき偽作である(八七頁)。第五にはピタゴラス主義が見出される(九〇頁)。第六も第二に近い第十三と共にピタゴラス學徒の界から出たものであらう。第九はキケロの證言があるけれども、もし此の書翰が眞書ならば三八八年前のものではあり得ない。然るにエケラテースをネアニスコス(若人)としてゐる(三八五

り)、このエテケラテースは「ペイドーン」のエテケラテースであつて三八八年にはホアニニコスではない(九五頁以下)。第十一は、リツケルが第二三に近いとしたがそれは表面的類似である。併し八五八〇のソークラテースの病氣に關しての句法は、プラトーンには(おそらく四世紀のどの作家にも)類例のないものである(Plato, *Phaedrus* II § 273a-b)とする句法)これが、この書翰の偽作的性格を明示しうる唯一の指標である。他には思想上、文體上眞作性の反證となしうるものは見出されぬ(九七頁)。第十二はピタゴラス主義的であり古人も疑つた(九七頁以下)。第四をリツケルはスベウシツポス作としてゐるが、文體上より見て修辭家の模作らしい、とくに三二一aはイソクラテースの「エウアゴラス」の模倣と考へられる(六八頁)。第五は短かすぎて決定できないが、模作とすれば甲ノ上と云ふべし(六九頁)。〇かくてスイエは第七、第八書翰を異論をさしはきむ餘地なき眞書とし(九八頁)、第二、五、六、九、十二、十三を「アカデミーと可成りに親しかつたピユタゴラス派の世界から生れたもの」とし、他をすべておそらくは修辭家の作とした(九九頁)。

かくして少くとも第七、八書翰は獨佛英の代表的な學者によつて眞作と認められ、論争も一段落かと思はれた時ロバンは全部を疑作として問題を再び懷疑の淵に投げかへして了つた。ロバン(「プラトーン」三一頁以下)曰く、

今日古代人に做つて全部を眞作とする者はゐないが、第七、八は殆んど異口同音に眞作と看做されてゐる。その際、論議の基礎となるものは、(1)文體の比較、(2)内的蓋然性(書翰中の教説またはそのなかに語られてゐる歴史的人物・事件等に關する)とである。併し(1)文體の比較によつて眞偽を吟味することは書翰といふジャンルについては極めて困難である。もし此等の書翰が偽作者の作であるならば(而も我々は書翰といふジャンルの被等偽作者間に如何に寵愛されたかを充分に知つてゐる!)、彼等は著者の文體の模造に専心せずにはをれなかつたであらう。模作が成功したかどうかを知るためには、殊に綿密な分析が必要であらう。優れた裁判官たちの意見の相違並びに點睛はこの問題が如何にデリカであるかを證明してゐる。(2)内的蓋然性はどうかといふに、それは極めて主觀的なものである。内的蓋然性が成服的に感じられる時があるとするなら、それは歴史なり教説なりに關する何等かの先入見を丁度うまい工合に支へてくれるからではなからうか。眞作性の指標として通過しうる様な點に無邪氣に反復して力を入れ

てゐること、對話篇に由來する顯著な慣用語を本文に挿入するそのやり方、教説に關する部分の其處此處に散見してゐる奥儀の荷ひ、等を怪しむことができる。「書翰」が興味のある指示をふくんでゐることは可能であるが、併しそれはその眞作性に關しては少しの決定力もたない。併しロバンは傳記の資料として之を用ゐてゐないのではない(たとへば九頁に於て第七書簡を用ゐてゐる)。

書翰文學は創造力の衰へ果てた古代末期のデカタンス時代(五、六、七世紀)の産物であるが、併し書翰は既にアレキサンドリア時代(前三〇〇——一四七)に於て盛んであつたことは、上引(十二月號二九頁)と同所のガレーノスの報告に著名人物の署名ある書翰が圖書館に賣却されたことからも推測されうることである。かゝる蒐集は帝政時代(前三〇年以後)に至つて次第に増大し、つひにバラリス(前六世紀)、ソローン、テミストクレース、ソークラテースの書翰といふものが現はれ始めた。(此等の書翰は上述ベントレイの研究によつて斥けられた)好奇心、文才練磨等のために多くの書簡が贗造もしくは模作された。併しながら他方眞書もないわけではなく、現に我々はパウロの書簡を有する。更に溯つてはエピタロスの書簡もある。けれども此等は個人に與へた信書ではなく、信徒または門弟に教へんとして書翰の形をとつたものである。またプラトーンより年長のイソクラテース(三四六一—三三八)にも眞翰とせらるる書簡がある。併しこれも個人宛の書翰といふよりはむしろ「公開狀」とでもいふべきものである。けれども斯くの如きものの存在は、プラトーンの書翰を全面的に否定するを躊躇せしめるであらう(以上スイエによれる箇所多し)。

併しゲロートの如き傳承承認の立場も既に上述著作の眞僞論に於て棄却された。テイラーはアリストパネースの三部集典中の「書簡」を現存書翰十三通と等しいと考へ、これを有力な證據としてゐるが併し、それはテイラーの想像

にすぎない。此の點ヴィラモーヴィッツ(二卷二七頁)、スイエ(六頁)の如くむしろ疑ふべきであらう。古人によつて疑はれテイラーにも疑はれてゐる第十二書翰はおそらくアリストパネース時代のものであるまい。のみならず、書翰の順位は寫本によつて異同があり、Yに近いZでは第十三は三位にあり、第十二が最後にあるといふ(スイエ同所)。然らば現存の順位はアリストパネース以來不動のものとして傳承されつたものではない。そこにはまた數の増加といふことも考へらるゝ。アリストパネース云々は證據とはならない。更にキケロの證言についても、書翰のあるものがピタゴラス主義者の手になるものならばキケロ以前のものであり、また文體についてはロバンの反駁があつた。それでは我々は「書翰」に對して如何なる態度をとるべきであらうか。

上述の如く第十二は已に古代人によつて疑はれ、我々のテキストにも (*Ἀρχαῖος τῆς οὐ Πλάτωνος*) 「括弧原文」 「プラトーンのではない」と反論されてゐる」とある。第一はバーネット・テイラーによつてさへ文體上他の書翰と全く異なる誤認作とせられてゐる。のみならず流布本には「ディオーンより」とある、これはおそらくフィチノに由來すると註せられてゐる(バーネット、スイエ、アーペルト)が、フィチノにも何等かの根據があつたのではなからうか。ともかく、この二通は大體全部を認めようとするアーペルトによつても僞また疑書とされてゐる。もし此の二通が疑はしいならば當然他の書翰も亦一應うたがはれなければならない。特に第十二と同じ類に屬する第九、第一と同じ類に屬する第二、三、十三は疑はしい。總じて個人宛の書翰は疑はしいと考へられなければならない。何故なら、紀元一世紀以前の書翰で眞作と認められるものは前述の如く、イソクラテースの書翰のごとき「公開狀」と稱すべきものかエピクロスやパウロのその如き弟子または信徒に興へたものであるから。かくして第六・七・八のみが残る。

ヴィラモーヴィッツが此の三通を眞作としたことは、かゝる根據に基くものではないが、一應首肯されうる。それではこの三通は眞作と認めらるべきであらうか。之に對しては上述のロバンの疑惑がある。第六は二頁を占むるにすぎぬ短簡故積極的に眞作性を主張することはできないにしても、三十四頁を占むる書翰第七はプラトーンの眞書と感ぜざるを得ない。それは主觀的印象にすぎぬとロバンはいふけれども、三十四頁に互つて斯くの如き書翰を書き得る者は他人の書を膺作するとは考へられない。また誤認作として見ても、第七書翰に述べられてゐる様なこと、即ちアテーナイに於ける少年時代の體驗、ソークラテースのこと、ディオーン・デオニシオスとの關係等がプラトーン以外にもあり得るとは狂人に非ざる限り想像することさへも不可能である。第七書翰は文體研究上諸家によつて非プラトーン的な點は見出されてゐない。この書翰が疑はれる理由はその哲學的挿論中に見出さるゝ「秘教」の銜ひである。事實此の箇所を根據としてプラトーンの「秘教」といふことが唱へられたのである。併しこの部分（その一部を私は第七節で用ゐた）は素直に讀むならば秘教的な何ものをもふくんでゐない。^{*}これはプラトーンの教育が生きた對話に基くことを證するのみである。「バイドロス」の所説就中二七六に全然符合するものである。

* この點私はスイエの解釋（五五頁）に同意する。スイエは已に此の考を一九二三年に Archives de Philosophie Vol. I, cahier I. 所載の論文で述べたと云つてゐる。

第八書翰については積極的に眞作性を主唱すべき根據を未だ見出さない。姑く私は第七のみを眞作とし、第六、八は今後の研究にゆづることにして疑作としておく。かくて第七は眞書、第六、八は眞書の可能性ある疑書、第一、十二は偽書其他は偽書に近い疑作と看做し度い。従つて私の暫定的結論は第七のみを眞作とし、第六、八を疑作とし、

他を僞作とするホフマン説と殆んど一致することになった。

我々はこの第七書簡からプラトーンのシラクサ行にからむ晩年の外的傳記を知りうるのみならず、少年時代以降第一回シラクサ行(自ら四十歳頃といふ)までの彼の政治に對する態度を知ることができる。併しこれのみを資料として彼の少青年時代を考へることは許されない。彼の少年時代にはまた詩作があり、ヘーラクレイトスの流轉觀があつたのである。

(完)

頁	行	正	誤
昨年十二月號	一九	終	Stephanus 1578
	二四	一一	六、七、八
	三〇	一	honn.
	五〇		nom.

プロレヒテル表クリトーン以下を左の如く改む。

Protag.
+ Ion
Laches
Staat I
Lysis
Charm.
Euthyph.

またクラテュロスを兩ヒツ、ピアス間に入れる。

(十二月號所載の順序は敘述の順序で時順ではなかつた)

前月號

四四

九——一〇

插紙内の邦文を削り、トピカの次に I. S. Ionag. を加へる。

(私は粗忽のため、テイラー本十二頁の脚註を見落してゐた。次行の十九世紀は勿論二十世紀の誤り。)
 ヴィラモウヴィツ、プレヒテル、テイラー並びに諸著諸賢に深く御詫び申上ぐ。